

600年の都、ソウルの漢陽都城を歩く

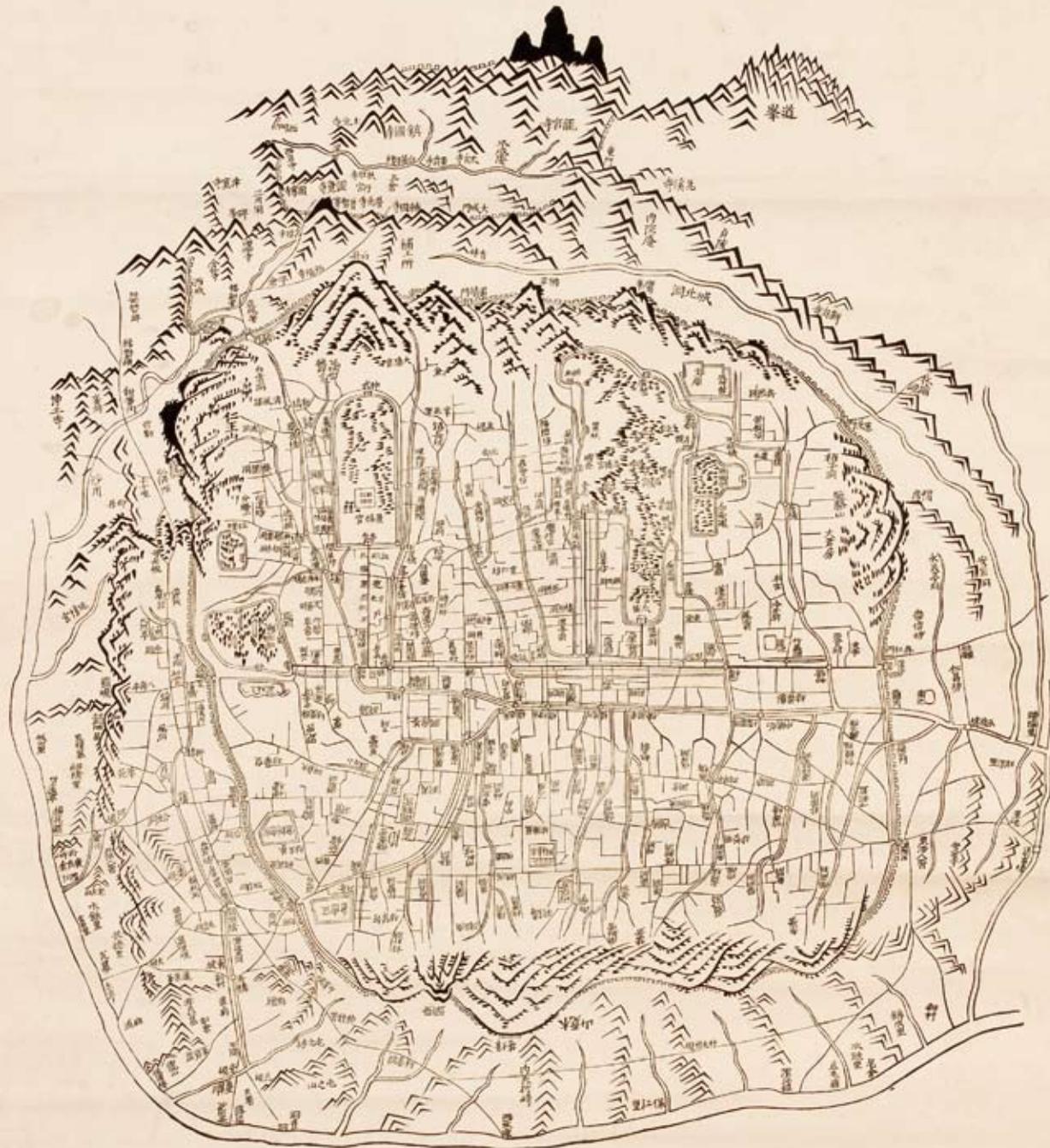
ソウルの漢陽都城は、朝鮮の首都であった漢陽を取り囲んでいる城郭で、内四山と呼ばれる仁王山^{338m}、北岳山(白岳山)^{342m}、駱山^{125m}、南山^{262m}の尾根に沿って築城されており、その長さは、延々18.6kmに達する。

ソウル漢陽都城には、東西南北の4方向に4つの門が置かれ、各門の間にはさらに4つの小門が設置されている。

* ソウル漢陽都城は韓国語で「ソウルハンヤンドソン」と発音される。

ソウルの 漢陽都城 歩き

首善全圖



出典: 国立中央博物館

首善全図

1824年から1834年の間に古山子金正浩が製作した木版本のソウルの地図と推定される。木版の大きさは縦82.5cm、横67.5cmであり、実測により精密に描かれた地図で、精度と規模の面で最も優れた都城図と評価されている。都城はもちろんのこと、宮廷、宗廟、社稷、道路、山河を表現した。ソウル漢陽都城の正門である崇礼門を出発し、時計回りに城郭歩きをすると、以下のような順で、歴史的な遺跡に出会える。



ソウルの 漢陽都城 歩き

ソウルの漢陽都城道の概要 _____ 04

四大門と四小門 _____ 05

城壁の構造と築造方法 _____ 06

ソウルの漢陽都城を正しく歩き _____ 08

崇礼門 - 彰義門区間 _____ 10

彰義門 - 恵化門区間 _____ 16

恵化門 - 光熙門区間 _____ 20

光熙門 - 崇礼門区間 _____ 24



1 崇礼門

3 敦義門址

4 仁王山

慶熙宮

徳寿宮

2 昭義門址

5 彰義門

景福宮

6 北岳山

7 肅靖門

昌徳宮

昌慶宮

8 恵化門

9 駱山

10 興仁之門

11 光熙門

12 南山

1~12
歩く順

ソウル 漢陽都城史跡第10号

ソウルの漢陽都城は、朝鮮の首都であった漢陽を取り囲んでいる城郭で、内四山と呼ばれる、仁王山^{338m}、北岳山(白岳山)^{342m}、駱山^{125m}、南山^{262m}の尾根に沿って築城され、その長さは延々18.6kmにおよぶ。

* "ソウル漢陽都城"は、ソウルの城郭の新しい名前として2011年7月に告示された。

ソウル漢陽都城のはじまり

1392年7月、高麗を崩して開城の寿昌宮で朝鮮を開国した太祖李成桂は、一ヶ月もたたずに遷都を決心して、太祖3年¹³⁹⁴10月に都を開城から漢陽に移す。以来、太祖4年¹³⁹⁵9月には宮殿、宗廟、社稷を完成して、翌月には都城築造都監を設置する。太祖5年の1396年1月9日から本格的なソウルの漢陽都城築城工事を開始したが、49日後の2月28日にほとんどの工事を終えた。しかし、この期間の築城は、工事期間も短く、真冬に施行したため、欠陥も多く、同年8月6日から9月24日までの49日間、第二次築城工事をを行った。この時、ソウル漢陽都城の四大門と四小門も完成した。

ソウル漢陽都城の築城

太祖時代の築城工事は、長さの合計が5万9500尺で、600尺^{約180m}を一つの区間とし、全部で97の区間に分けて実施したが、北岳山(白岳山)頂上から東に駱山、南山、仁王山に回りながら、千字文の天の字から甲の字までを使ってそれぞれ区間の名前を付けた。第1次工事には11万8000人、第2次工事には79万400人が動員さ

れた。この時、高く険しい山は石を積み、平地は土で築いた。工事区間ごとに城石に工事責任者の名前と役職、工事を担当した村の名前、工事日などの文字を刻み込んだが、今もその痕跡が残っている。以来、世宗4年¹⁴²²には、土で築いた部分を全て石に変えて、より高く積みあげ、肅宗30年の¹⁷⁰⁴3月から約5年間にわたって大々的に改築した。

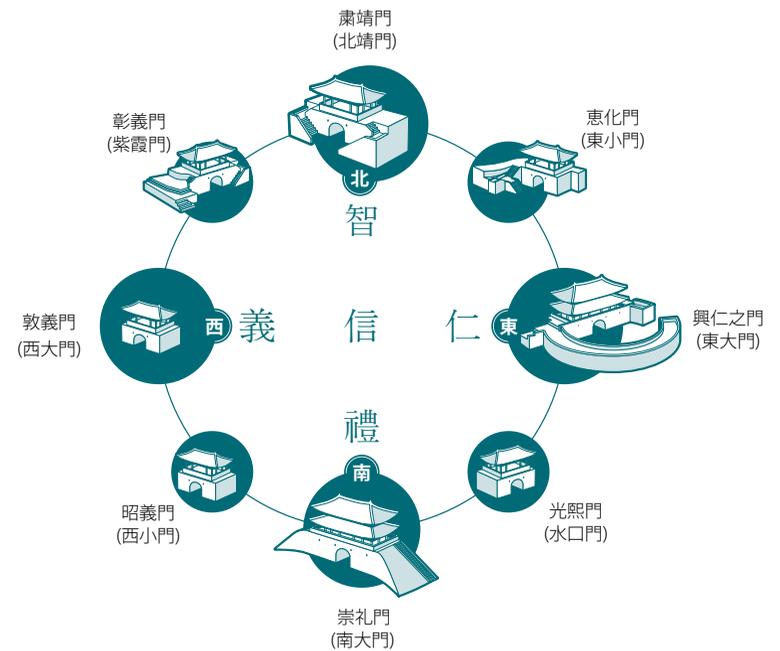
ソウル漢陽都城の毀損と復元

ソウルの漢陽都城は、朝鮮王朝の時に整備が続けられ保守されてきたが、日帝強占期に、都市計画という名目で、複数箇所の城壁が崩された。また、電車の路線ができて、興仁之門、敦義門、崇礼門周辺も破壊された。光復後、韓国戦争と無分別な都市化の影響で城郭の損傷が続いた。その後、1975年から1982年までソウル漢陽都城の復元事業が大規模に行われ、それ以降にも恵化門と光熙門の復元をはじめ、部分的に補修工事が続けられた。2000年以降、ソウル漢陽都城の歴史・文化的価値が再認識され、ユネスコの世界遺産登録を目指し、ソウル漢陽都城の復元事業を推進している。

ソウル漢陽都城の 四大門と四小門

ソウル漢陽都城には、東西南北4方向に4つの門が置かれ、各門の間にはさらに4つの小門が設置されている。この8つの城門は、1396年の第1次築城工事の時には完成できず、その年の第2次築城工事時に完工した。

 ソウル漢陽都城は、東西南北4方向に4つの門が置かれ、各門の間にはさらに4つの小門が設置されている。この8つの城門は、1396年の第1次築城工事の時には完成できず、その年の第2次築城工事時に完工した。当時の四大門は、東の興仁門興仁之門、西の敦義門、南の崇礼門、北の肅清門肅靖門であり、四小門は、東北側の弘化門恵化門、南東の光熙門、西南の昭徳門昭義門、北西の彰義門を言う。儒家では、人が常に守るべき5つの徳目として、五常すなわち、仁義礼智信を言うが、四大門の名前は、この五常の五行思想に基づく方位に合わせて名付けた。“仁”は、方位で東を意味するので、東大門の名前は興仁門であり、“義”は西をいうので、西大門は敦義門である。“礼”は南を意味するので、南大門は崇礼門となった。ただし、北は“智”が入らなければならないが、例外的に清の字が入った肅清門と名づけられ、中央を意味する“信”は、都城の中心地にある鐘閣の普信閣に見ることができる。



城壁の構造

城壁は、大きく本体部を構成する体城とその上についでいる低いへの女牆に区分される。特別な施設として曲牆と雉城、城門と門楼、壅城、暗門、水門などがある。

体城

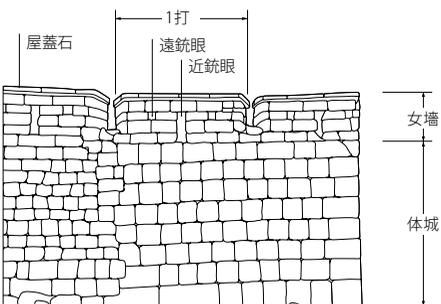
城壁の根本である胴体をなす部分である。

女牆

城ガクウイあるいは城堞とも言う。体城の上に上げられた低い塀で味方の身を隠したまま、敵を銃や火炮で攻撃できる施設である。一つの女牆を「1打」と呼ばれ、1打には銃眼が3つあるが、近いところを撃つ近銃眼が真ん中にあり、遠くを撃つ遠銃眼が両脇にある。

屋蓋石

女牆の上へのせられた屋根石である。雨水が体城に流れ込むのを防止し、有事の際に屋根石を押して城の上に上がってくる敵兵を落とす。



曲牆(曲城)

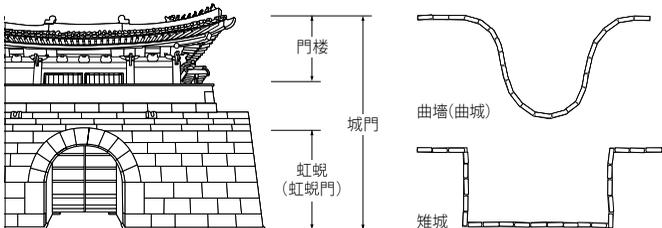
城郭の一部を外に押し出すことにより曲げられるように築いた城である。ソウル漢陽都城の曲牆は北岳山(白岳山)、仁王山区間の二ヶ所で見ることができる。

雉城

城郭の一部を外に押し出すことにより角度があるように築いた城。ソウル漢陽都城の雉城は、東大門歴史文化公園に一部復元されている。

城門と門楼

都城内外の自由な往来のために設置した門が城門で、体城部分の虹蜃門の上に建てた楼閣が門楼である。ソウル漢陽都城の城門には、四大門と四小門があり、かつては崇礼門と光熙門の間に南小門を建立して、ソウル漢陽都城の門が9つあったこともある。



壅城

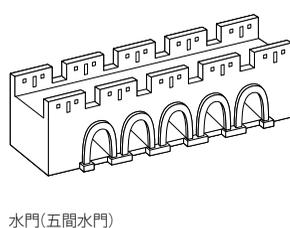
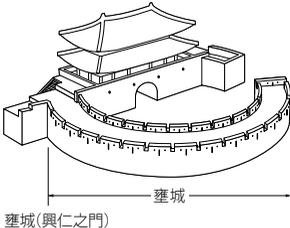
城門を効果的に防御するための施設で、外から門が見えないように半円状に城門を囲んだ城である。ソウル漢陽都城には、唯一興仁之門に設置されている。

水門

城と河川が接するところに水が流れるように設置した虹蜃門、ソウル漢陽都城には、興仁之門の横にある清溪川で五間水門が、南山の水が流れたところに二間水門があった。現在、五間水門は、元の位置から少し離れて1/2サイズの模型として残っており、二間水門は、東大門歴史文化公園に復元されている。

暗門

ひそかに兵を移動したり、軍需物資調達のために作られた小さな門。普段は石で塞いでおき、戦時のみに使用する秘密の通路である。現在、ソウル漢陽都城には、全部で8ヶ所の暗門がある。



ソウル漢陽都城の時期別築造方法

ソウル漢陽都城は、朝鮮の太祖の時に最初に築造された後、世宗と肅宗の時、大規模の修築と改築が行われた。この三つの時期に積んだ城壁は、それぞれ石の形も違って、積みあげの方法も違うため、容易に区別される。

太祖時(1392~1398)の城壁

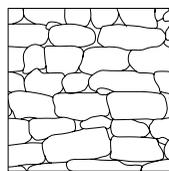
自然石を粗く加工して積んだが、下には大きな石を置いて上へ行くほど小さな石で積みあげながら、少しずつ内向きに積んでいった。城石は、花崗岩と片麻岩の二種類が使われたが、ほとんど未加工の自然石状態だった。太祖当時の城壁はあまり残っていないが、南山地域で容易に見つけることができる。

世宗時(1418~1450)の城壁

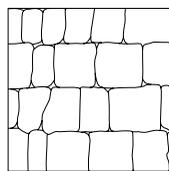
世宗時には、石を長方形に加工して積んだが、下は、比較的大きな石を使用しており、上には、小さな石を積んである。太祖時と同じように、上へ行くほど少しずつ内向きに積み、城石は花崗岩を使用した。

肅宗時(1674~1720)の城壁

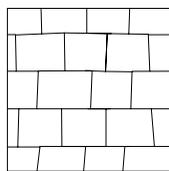
石を2尺^{約60cm}ほどの正方形に規格化して積んである。このため、間隔も一定で壁面も垂直に近い。城石は花崗岩を使用した。特に女牆の場合、太祖や世宗時の原型はほとんど残っていないが、肅宗時の壁には、女牆が原型そのまま残っている。



太祖時の城壁



世宗時の城壁



肅宗時の城壁

ソウルの漢陽都城を正しく歩き

ソウルの漢陽都城を歩く方向

ソウル漢陽都城を歩く際は、反時計回りに「崇礼門-興仁之門-肅靖門-敦義門址」の順に歩くか、それとも、時計回り、すなわち、「崇礼門-敦義門址-肅靖門-興仁之門」の順に歩く。どちらの回り方もそれぞれの利点があるが、反時計方向は、時計回りに比べて少し楽に歩け、時計回りは、朝鮮時代に行われていた巡城の伝統に沿って回れるという長所がある。この小冊子では、朝鮮時代の巡城の伝統に従って説明されている。

朝鮮時代の巡城遊び

朝鮮時代には城郭に沿って歩きながら都城内外の風景を鑑賞したが、これを「巡城」と呼ぶ。朝鮮後期の漢城府の歴史と様子を記録した<漢京識略>には、「春や夏になると、漢陽の人々は都城を一周して周辺の景色を楽しんだが、日の出と共に出発しても日が沈む頃までかかる」と書かれている。このような巡城は、日帝強占期にも続いた。

ソウル漢陽都城を歩くための準備

歩きやすい服装と靴、そしてリュックサック

活動しやすく軽い素材の服が良い。特に下着は、綿織物を避けた方がよい。綿は汗の吸収が良い一方、乾きが悪いため体にはりついて心地がよい。靴は、底にクッションがあり、硬くない運動靴やトラッキング靴、軽登山靴がよい。リュックサックは、間食、飲料水、スピアの服くらいを収納できる大きさなら十分。冬には手袋と防寒帽子を着用し、雪が降った後は靴に装着するアイゼンが必要である。

その他の準備物

キャンディーやチョコレートのような簡単な非常食、日焼け止め、帽子、サングラス、長袖の服、レインコート、メモ用紙、筆記具、カメラ、身分証明書、ゴミを入れる小さなビニール袋。

歩きマナー

ゆっくりと歩く。右側を歩く。大勢で行く時は1列になって歩く。ゴミを落とさない。何より都城を傷めないように注意する。

区間一

過去と現在の共存、仁王山の裾で息をする



崇礼門-彰義門区間 | 全長：5.3km / 所要時間：3時間30分

ソウル漢陽都城の正門である崇礼門から出発して最初に歩く貞洞道には、大韓帝国末期から日帝強占期の跡があちこちに残っている。以降、城郭は仁王山^{338km}の稜線に沿って険しい曲線を描いて上昇と下降を繰り返し彰義門に至る。仁王山稜線区間は2012年5月まで復旧工事によりアクセスが制限されている。[関連10ページ](#)

区間二

白岳マルの下、ソウルが見渡せる



彰義門-恵化門区間 | 全長：4.7km / 所要時間：3時間

内四山の主山に相当する北岳山(白岳山)^{342km}の急傾斜に沿って城郭が設けられた。頂上の白岳マルから眺めるソウルの美しさは筆舌に尽くしがたいほど優れている。彰義門案内所とマルバウイ案内所の間は、身分証明書がなければ通行ができないため、家を出る前に忘れていないか確認しよう。[関連16ページ](#)

区間別
特徴

区間三

歴史とファッション・文化が会う



恵化門-光熙門区間 | 全長：3.2km / 所要時間：2時間

老若男女誰でも快適に楽しむことができる城郭探訪路の中でもなだらかな傾斜の区間である。四大門の中で唯一壘城のある興仁之門を経て、水口門とも呼ばれていた光熙門まで歩くコースになる。平地区間の城郭がかなり傷んでおり、残念な思いが残る。[関連20ページ](#)

区間四

600年の都、漢陽と向かい合う



光熙門-崇礼門区間 | 全長：5.4km / 所要時間：3時間

光熙門を出発して奨忠洞城郭道に着くと、保存状態の良い城郭と探訪路に出会う。南山^{262m}区間には階段が多い方だが、樹木が茂っており空気が爽やかである。南山から見下ろすソウルの夜景はソウル必見の風景なので、見逃さないようにしましょう。[関連24ページ](#)



駱山城郭

過去と現代の共存、 仁王山の裾で息をする

ソウル漢陽都城の正門の崇礼門からスタートして昭義門址と敦義門址を通って右白虎仁王山^{338m}を超えて、彰義門に至るまでの区間である。崇礼門、昭義門址、敦義門址の区間は、奨忠洞区間とともにソウル漢陽都城城郭の損傷が最も激しい所なので、城壁に沿って歩くことができない。自ずと貞洞の方に迂回することになるが、ここでは大韓帝国の時代に、日本とロシアをはじめとする列強が角逐を繰り広げた場所である。金九先生が滞在した京橋荘、洪蘭坡家屋、ディルクシャ(DILKUSHA)、権慄將軍家跡地のイチョウなどを過ぎると、内四山の中の仁王山の頂上に達する。頂上に登ると、ソウル漢陽都城の残りの内四山の山勢とともにその中に位置するソウルの姿が一望できる。仁王山を越えると、「尹東柱詩人の丘」があり、その下に彰義門がある。

コース | 崇礼門 - 昭義門址 - 敦義門址 - 仁王山 - 彰義門

TIP 仁王山区間は、2012年5月まで城郭の復元工事で出入りが統制されているので、仁王スカイウェイ散策路(仁王山路)を利用して、彰義門まで行かなければならない。

全長 | 5.3km
 所要時間 | 3時間 30分
 難易度 | 崇礼門-権慄將軍の家の跡地：下
 権慄將軍の家の跡地-彰義門：中

ソウル漢陽都城
 保存・復元区間
 消失区間
 歩行道
 工事区間

地下鉄
 1号線
 2号線
 3号線
 4号線
 5号線
 6号線
 乗換駅



崇礼門進入交通

- ソウル駅3番出入口
- 市庁駅9番出入口
- 103, 104, 105, 163, 201, 202, 261, 262, 263, 402, 405, 406, 408, 604, 700, 701, 702, 704, 707, 7017, 7019, 7021, 7022, 8880, 9409, 9710



崇礼門

ソウル漢陽都城の正門で国宝第1号である。南に位置し、南大門とも呼ばれ、朝鮮時代の太祖5年(1396年)に創建した後、太祖7年(1398年)に改築し、世宗30年の(1448年)に完全に再建した。この門は、石で築いた石垣の中に虹状の虹蜺を置いて、その上に前面5間、側面2間の2階建て楼閣をのせた形である。屋根は前後から見ると台形、両側面から見ると三角形をした隅ジンの屋根である。屋根と軒の重さを分散させる仕組みの栱包が柱の上のみある場合は柱心包式、柱の上はもちろんのこと、柱の間にもある場合は多包式と呼ばれるが、崇礼門は多包式である。2008年2月に放火で焼失されるまで、ソウルに残っている木造建物の中で最も古い建物だった。火に焼けた崇礼門は2010年2月に復元着工式を行ったが、2012年12月の完工を目指している。今回の復元には、門楼のほか、城門左右の城壁も一部を復元する。



崇礼門の復元

崇礼門の復元工事は、既存の素材を最大限活用して、日帝強制占領期に破壊された城門の左右側の城壁とその時に損傷した床を元通りに復元する。また、韓国の伝統的な方法で石を整えて使用するなどの復元原則に従って進めている。



崇礼門の扁額

扁額の字を縦に書いた理由は、景福宮が向き合う冠岳山の火気を抑えるための策であるという話が伝えられている。



大韓商工会議所付近の城壁

崇礼門と昭義門址の間にある一部復元された城壁の写真である。日帝強占期に、ソウル漢陽都城は、崇礼門付近から損傷が始まっているが、この区間がその部分に当たる。女牆はもちろん、体城すら空しくなっており、一部収拾した昔の城石の上に新たに数段を積み上げて簡易復元した。



昭義門

ソウル漢陽都城の四小門の一つで、都城の西南側の敦義門と崇礼門の間にあり、西小門とも呼ばれていた。朝鮮の太祖の時に最初に建てられたときは、昭徳門とも呼ばれていたが、以降昭義門に変わった。朝鮮時代に都から遺体を運ぶ時、光熙門や昭義門を通らなければならなかったため、西に出る遺体はすべて、この門から出て行った。日帝強占期だった1914年に都市計画という名目で、完全に撤去された。



昭義門址

昭義門址の標石は、中央日報社の横の駐車場タワーのフェンスの上であって見つけにくいため、注意深く見ないと見つからない。



敦義門

敦義門は、ソウル漢陽都城の西の方にある大きな門で、朝鮮太祖5年¹³⁹⁶に都城の他の門とともに竣工されたが、西大門新しい門新門とも呼ばれた。日帝強占期の1915年に日帝が都市計画に従って電車を複線化するという名目で撤去され、今では敦義門の位置を"貞洞交差点"のあたりと推定するだけである。



敦義門址

昔の敦義門があった位置であることを示すために設置したパブリックアート作品の「見えない門」。ソウル市が「都市ギャラリープロジェクト」(2007年)の一環として、消えた敦義門の昔の記憶を喚起させるために製作した作品。



重明殿

レンガを使用した、韓国初の西洋式宮殿の建物で、1901年に建てられた。皇室図書館で、最初の名前は漱玉軒であった。乙巳条約が締結された悲運の場所でもある。



京橋荘

大韓民国臨時政府の主席だった白凡金九先生が1945年に中国から帰ってきた後、1949年6月26日に暗殺されるまで執務室や居所として使用していた建物である。

洪蘭坡家屋

洪蘭坡の家屋は1930年代にドイツの宣教師がレンガで造った洋館を作曲家の洪蘭坡先生が買い取って住んでいた所である。1930年代の洋風住宅の特徴をよく示している所である。



ディルクシャと権慄將軍家の跡地

樹齢約450年のイチョウがあるところは、壬辰倭乱(文禄慶長の役)の3大勝の一つである幸州大捷を勝利に導いた権慄將軍の家があった所である。イチョウの下にこのことを示す小さな標石がある。そして、左の赤いレンガの家は、3・1運動のニュースを世界に知らせたアメリカ人特派員のテイラーが住んでいたディルクシャ(Dilkusha)という家であるが、「ディルクシャ(Dilkusha)」とはヒンズー語で「喜びと幸せ」を意味する言葉である。



社稷近隣公園区間の城壁

この区間では、城壁の内側の道や、外側の細道のいずれかを選択できる。城壁の内側の道は、都心の高層ビルを眺めながら広い道を楽に歩くことができ、外側の細道は、ツタと古風な城壁が調和した風景が絵のように美しいところである。夜にここに来たら、ライトアップされた城壁と、南山の夜景を楽しむことができる。



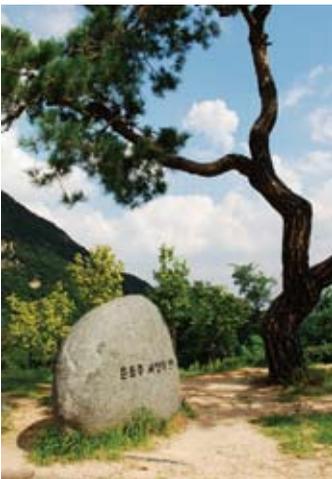
禅岩(ソンバウイ)

ソウル漢陽都城の外側にある一組の岩であるが、岩がまるで僧侶が法衣をまとっている姿のようだという禅岩(ソンバウイ)という名前がつけられた。特異な形のため神聖化されたりした。



仁王山から眺めたソウル

仁王山に登るのは大変ではあるが、その分見返りも大きい。仁王山の頂上付近は、ソウルの景色が最も美しく見えるところであり、さらに、内四山のうち、残りの三つの山の姿が一目で見渡せるので、これらを結べば、ソウル漢陽都城の輪郭をある程度描いてみることができる。景福宮と光化門の姿もはっきりと見える。



尹東柱詩人の丘

尹東柱¹⁹¹⁷⁻¹⁹⁴⁵は、日帝強制占領末期を代表する詩人で、悲惨な民族の現実を克服しようとする作品世界を表していた。彼は、延禧専門学校(現延世大学校)に在学していた時、ここからあまり遠くない樓上洞で下宿していた。その時、代表作品である「序詩」と「星を数える夜」が誕生したが、時々ここに登ってきて詩想を練ったと伝えられている。

白岳マルの下、ソウルが見渡せる

- ソウルの漢陽都城を取り囲む内四山のうち、北岳山(白岳山 342m)を超える区間である。彰義門から城郭に沿って登ると、ソウル漢陽都城で一番高い所である白岳マルに到達する。ここを過ぎた後、しばらくの間は、ソウル漢陽都城全体の原型が最もよく保存されている区間が続く。今の工事実名制のような工事監督官の名前と工事日などを記した刻字城石も見ることができ、ソウル漢陽都城で自由に入出できる唯一の曲墻にも登ることができる。青雲台と燭台岩展望台の区間では、景福宮の中心軸とずれた光化門広場を確認して見ることができる。肅靖門とマルバウィ案内所、臥龍公園を過ぎると再び都心区間である。鍾路区恵化洞と城北区城北洞の境界に沿って続く城郭と、その跡に沿って行くと恵化門に着く。

コース | 彰義門 - 白岳マル - 肅靖門 - マルバウィ案内所 - 臥龍公園 - 恵化門

TIP 北岳山(白岳山)出入り可能時間
10:00~15:00(冬期)、09:00~15:00(夏季)、月曜日出入不可、身分証明書持参



全長	4.7km
所要時間	3時間
難易度	彰義門-肅靖門：上 肅靖門-ソウル科学高等学校：中 ソウル科学高校-恵化門：下



彰義門進入交通

1020, 7022, 7212

ソウル科学高校の後門前から道を渡って路地に入り、徹新中・高等学校の塀に沿って行く。



ソウル漢陽都城	地下鉄
保存・復元区間	1号線
消失区間	2号線
歩く道	3号線
	4号線
	5号線
	6号線
	乗換駅



彰義門

ソウル漢陽都城の北西に出る四小門の一つで、別の名前は、紫霞門とも呼ばれている。朝鮮太祖5年の1396年、他の門とともに築造されて昔の原型をそのまま保っている唯一の門である。仁祖反正1623年当時に事件に加担した軍隊が、この門を介して入って来たが、その理由と、功臣たちの名前を記録した扁額が今も門楼にかかっている。城門の虹蜺には鳳凰が刻まれていて、天井にも鳳凰の絵が描かれているが、これは彰義門の外側の地形がムカデの形状なので、ムカデの天敵である鶏の王様と言える鳳凰を刻んで描き入れたという俗説が伝えられている。彰義門の外に出ると煥基美術館、白石洞天とベクサシル谷、洗剣亭、大院君の別荘だった石坡亭の別棟の建物、蕩春大城の弘智門、普渡閣の白仏などを見ることができる。



彰義門-白岳マル区間の城郭

彰義門から白岳マルに続く城郭は、急な斜面に沿って築かれているが、その姿は断然最高である。この区間を登る道はすべて階段であるため、ソウル漢陽都城の区間のうち、難易度が非常に高い。途中にあるイルカの休息場で一息ついてから、秀麗な風景を眺めながら登ることができる。軍事地域なので、身分証を持参して彰義門案内所で立入り申請書を作成しなければならない。



刻字城石

青雲台付近の城壁に刻まれた文字で、築城工事を担当する人の名前と日付が記されているが、これは現代の工事実名制とも言える。



青雲台付近の城壁

青雲台293Mを過ぎると道は城の外につながる。北岳山(白岳山)道の中で唯一都城の外を歩く区間である。この区間の城壁は、ソウル漢陽都城の中で保存状態がよい所である。主に、肅宗時に築かれた城壁であるが、世宗の時代の城壁も見ることができる。



景福宮と光化門

青雲台と燭台岩展望台から見ると景福宮の中心軸と光化門の広場が少しずれていることがわかる。



北岳山(白岳山)-白岳マル区間の曲牆

北岳山(白岳山)の曲牆から北岳山の頂上の白岳マルまで長く続く城郭である。ここから見える城郭の流れは、ソウル漢陽都城の全区間でも指折りの風景である。また、急な傾斜の下に広がるソウルの都心が山の中の城郭と絶妙に調和して、一層魅力的である。



肅靖門

ソウル漢陽都城に四大門の格式を持たせるために建てられた城門で、都城の北大門に相当する。他の門と同じように、朝鮮太祖5年の1396年に初めて建てられたが、当時の名前は肅清門だったが、後に肅靖門に変えられた。現在の肅靖門の位置は創建当時と違って、燕山君の時に移された位置である。肅靖門は、人の出入りを目的として建てられたものではなく、ソウル漢陽都城の四大門の格式を整えるために建てられた門であるため、普段は常に閉められていたといわれる。そうするうちに漢陽で干ばつがひどい時期は、肅靖門を開いて崇礼門は閉められ、逆に梅雨が長びくと肅靖門は閉じて、崇礼門を開いておく風習があったという。肅靖門から出て階段を降りると肅靖門案内所がある。ここから三清閣に行くこともできるし、"金新朝ルート"と呼ばれる登山道に沿って北岳スカイウェーの八角亭とハヌルマルに行くこともできる。



ソウル漢陽都城と城北洞

肅靖門を通り過ぎた城郭は、臥龍公園の尾根に沿って城北洞へと下っていく。城北洞は、国と民族を愛していた先人たちの臭いがそのまま残っている。優れた見識で我が文化財の粋を広く知らせた谷津淳雨先生の旧家、青鹿派詩人の趙芝薫先生の昔の家の跡地、朝鮮時代の養蚕の創始者である西陵の祭祀を行った先蚕壇址、ソウルに残っている民間の昔の庭としては唯一という城樂園、市内の高級料亭から都心の中の清浄な山寺に変貌した吉祥寺、生涯祖国独立のために献身してきた萬海韓龍雲先生が住んでいた尋牛荘、李孝石、鄭芝浩などと九人会を結成して活動した越北小説家の尚虚李泰俊先生の旧宅、澗松全鑿弼先生が収集した文化財を保管して研究する澗松美術館などがここ城北洞にある。これらを訪ねて見るだけでも素晴らしい半日ツアーになる。

歴史とファッション・文化が 出会う

ソウル漢陽都城を取り囲む内四山の中で一番低い山である駱山125mを超える区間である。駱山は、ソウル漢陽都城の左側の守護神の役割を果たす山で、「タラク山」または「駱駝山」とも呼ばれた。恵化門を出発するとすぐに駱山に上がることになり、苦勞なく駱山を超えると、漢陽都城の東大門である興仁之門である。続いて清溪川に置かれている五間水門の模型を見てから、南山から流れてきた水路の上に作られた二間水門と雉城がある。二間水門と雉城は、東大門運動場を撤去する過程で発掘されて世の中にその姿を現したが、史料としてのみ伝えられた遺物であったため、その価値は貴重である。二間水門と雉城を経て漢陽工業高等学校の塀に沿って行くと、光熙門が車道を挟んだ向かい側にある。

コース | 恵化門-駱山-興仁之門-東大門歴史公園-光熙門

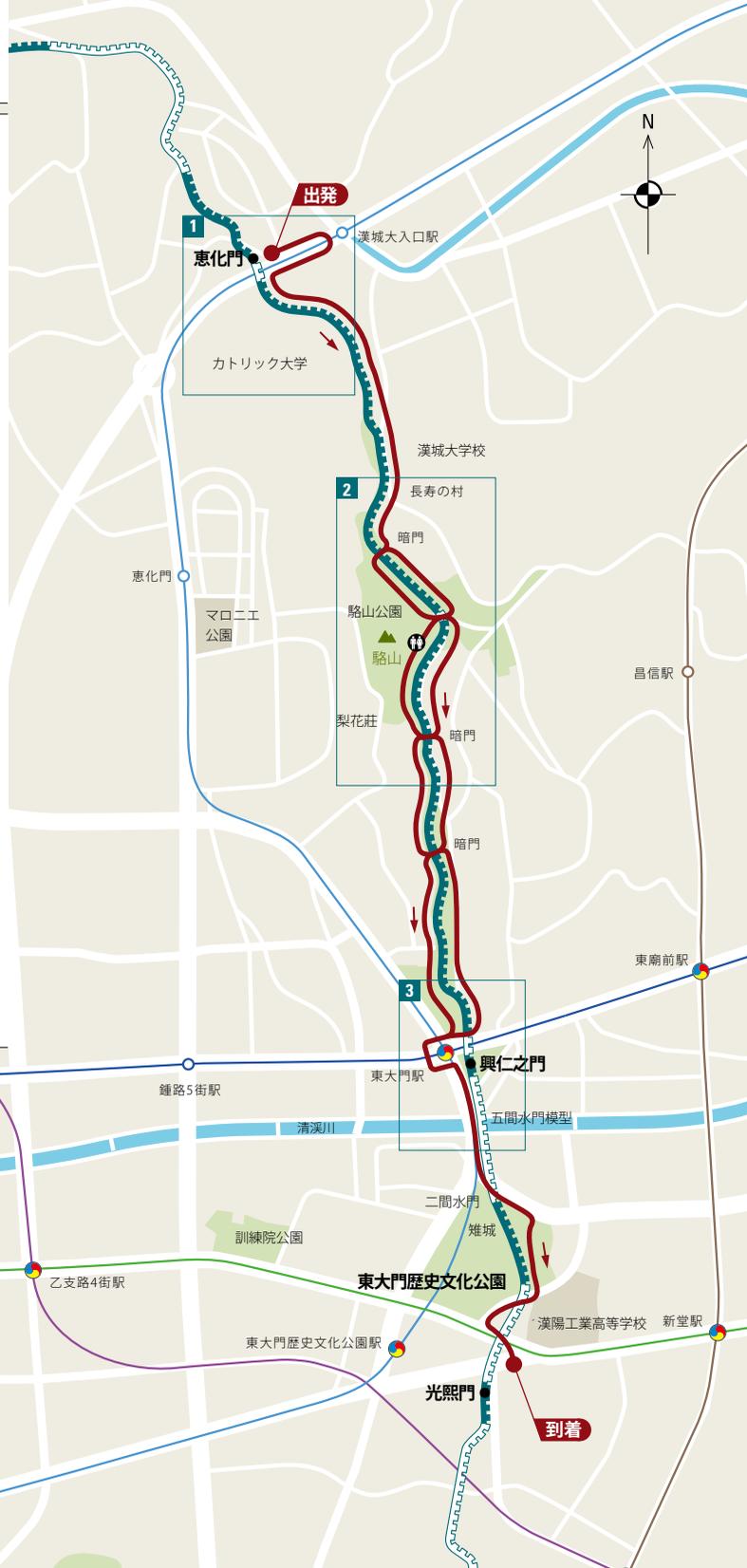
全長	約 3.2km
所要時間	2時間
難易度	恵化門-興仁之門：中 興仁之門-光熙門：下

ソウル漢陽都城

- 保存・復元区間
- 消失区間
- 歩く道

地下鉄

- 1号線
- 2号線
- 3号線
- 4号線
- 5号線
- 6号線
- 乗換駅



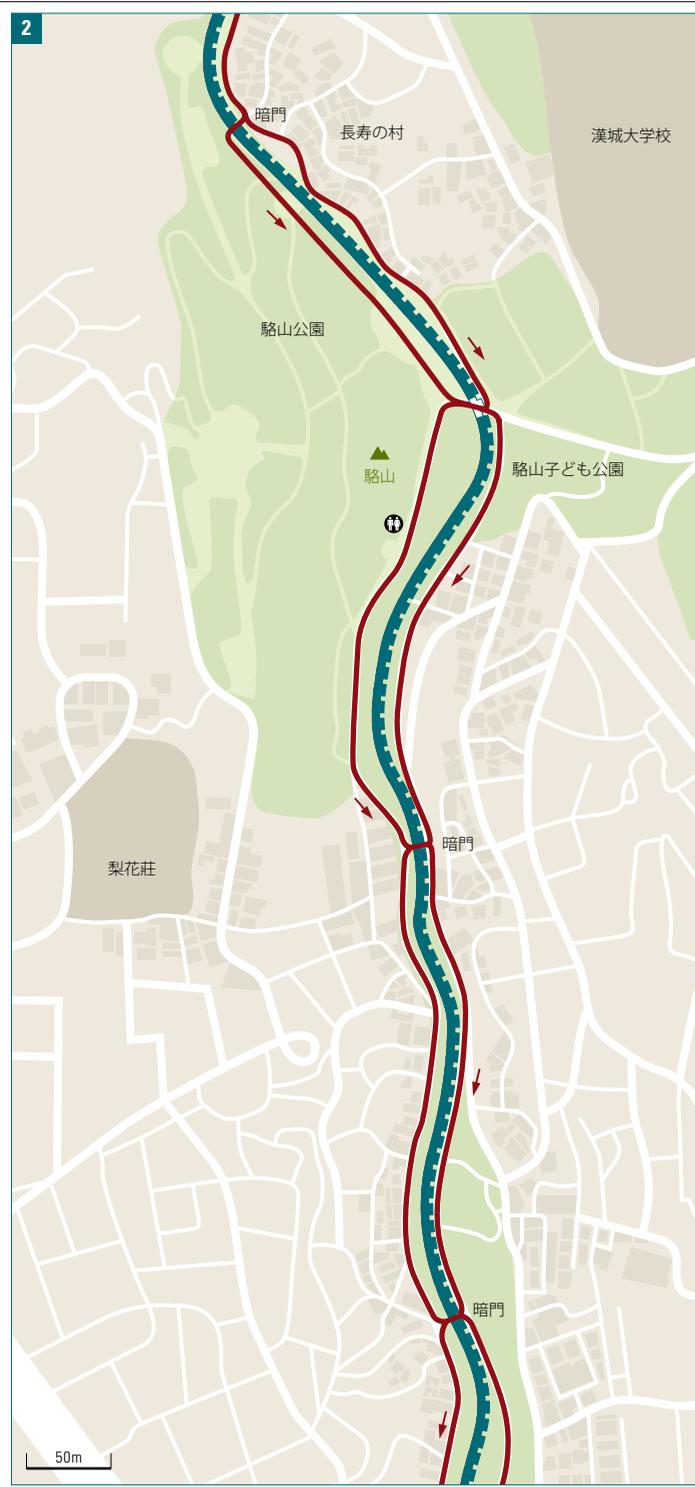
恵化門進入交通

漢城大入口駅4、5番出入口 102, 104, 106, 107, 108, 109, 140, 143, 149, 150, 151, 160, 162, 710, 171, 172, 272, 273, 1111, 2112



興仁之門進入交通

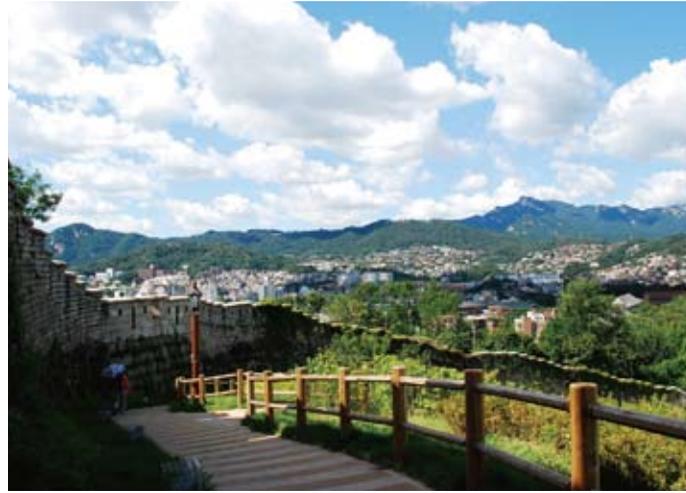
東大門駅6、7番出入口 101, 102, 103, 107, 108, 201, 260, 262, 270, 271, 301, 370, 721, 720, 2112, 7025





恵化門

ソウル漢陽都城の東北に位置する都城で、四小門の一つで、東小門とも呼ばれる。朝鮮太祖5年の1396年、他の門と一緒に築造されたが、当時の名前は弘化門だったが、後に恵化門に変わった。恵化門は、ソウル漢陽都城の四小門の一つであるが、四大門に劣らなかった。漢陽から北へ向かう京元街道が恵化門とつながっており、人々の往来が多かったうえ、また北大門に当たる肅靖門がいつも閉まっていたため、恵化門がその役割を代わりにしたからである。恵化門の虹蜺の天井にも彰義門と同様に鳳凰が描かれているが、鳥からの被害を防ぐために、鳥の王と言える鳳凰を描き入れたという話が伝えられている。恵化門の元の位置は、今の恵化門の下にある東小門路の丘である。



駱山の城郭と北漢山

駱山の尾根に沿って波打つように曲がる城郭と遠くソウル漢陽都城の北側の外郭を取り巻く北漢山の威容が堂々としている。駱山区間の城壁も比較的保存状態がよい。この道は城郭のすぐ下までぎっしり建ち並んでいた家屋を撤去して、新たに造った道である。



興仁之門付近の刻字城石

興仁之門から駱山に続く城郭入り口に残っている刻字城石である。いくつかの文字が残っているが、これを解読すると、肅宗32年(1706年)の刻字城石である。

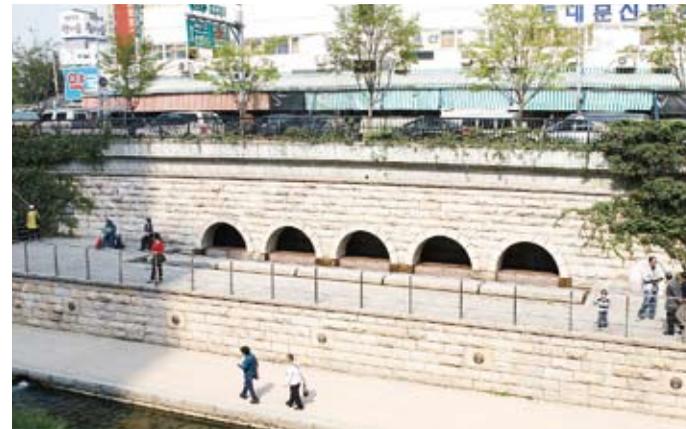
駱山区間の夜景

駱山区間がより好ましいのは、夜でも難なく登ることができるという点である。特に、駱山の城壁と南山が一緒になった夜景は、ソウルの漢陽都城全体の夜景の中でも屈指の場所である。ここは城郭の内外どこへにも歩いていくことができるが、城郭の内側がお勧め。この区間は、都城の内外の景色を楽しむことができ、また、内四山の流れとソウル都心の風景を眺めることができる。



興仁之門

ソウル漢陽都城の東大門に当たる門である。朝鮮太祖5年の1396年、他の門とともに築造されたが、当時の名前は興仁門であったが、その後、興仁之門に変わった。この城門が持つ最も大きな特徴の一つは、漢陽都城の城門の中で唯一壅城を置いている点である。壅城とは、城の外から門が見えないように門を囲んだ城をいう。興仁之門は、他の城門の名前より一字が多いため、その扁額も縦二行に書かれている。興仁門が興仁之門に変わった理由は伝えられていないが、俗説では、ソウル漢陽都城の左側の守護神である駱山と興仁門があるところの地勢が低くて、これを補完する目的で之の字を入れたという。



清溪川と五間水門の模型

五間水門は、清溪川が流れる興仁之門と光熙門の間の城郭の下に設置した水門である。しかし、1907年に水はけをよくするために水門を壊して五間水橋にしたが喪失した。



二間水門

南山から流れた水が清溪川と合流する水路の上に建てられた虹蜺水門である。これまでは史料のみで伝えられていた水門だったが、東大門運動場の撤去工事の際に発掘された。



雉城

敵を観察したり接近した敵に正面と側面から攻撃できるように城郭の一部を角をつけて外に突出させたものを雉城と呼ぶ。この雉城もこれまでは史料のみで伝えられていたが、東大門運動場撤去工事の際に発掘された。ここでは、二間水門と雉城のほか、多くの埋蔵遺物が発掘され、朝鮮時代の建築遺構も確認された。これらの遺物や遺構は、東大門歴史館と遺構展示場で見ることができる。

600年の都、漢陽と向かい合う

- ソウル漢陽都城を取り囲む内四山の中で南に当たる南山(262m)を超える区間である。光熙門と続く一部城壁を除いて、光熙門から奨忠体育館付近までは、城郭の損傷が非常に激しい。城郭の跡には住宅がぎっしりと建ち並び、城郭の痕跡を見つけ出すのも容易ではない。しかし、奨忠体育館の近くからは、路地に沿って城郭がそのまま残っている。南山に上がる区間は、太祖時代の城壁の姿をよく表しており、南山の頂上には烽燧台と国師堂址、そして、現ソウルの中心点の構造物がある。南山を下る時に蚕頭峰展望台に立ち寄ると、内四山のうち、残りの三山の姿も確認することができ、ソウル漢陽都城の消失した道もわずかながら伺える。南山の階段道が下りきったところに復元された南山子供広場の城郭を通り過ぎると、その先に崇礼門が見えてくる。

コース | 光熙門 - 南山烽燧台 - 子供広場 - 崇礼門



光熙門進入交通

- 東大門歴史文化公園駅 3番出入口
- 263, 507, 421, 202, 500, 2014, 2233



バンヤンツリークラブを出て、国立劇場前に進む。国立劇場の入り口から案内所を過ぎ150mほど登ると南山循環道路の分かれ道がある。左側の南側循環道路に沿って90mほど行くと、道に中区、龍山区の境界線があり、右側の城郭に沿って上がる階段がある。階段を上って行くと城郭を超える。



階段で城郭を超えると、南山の林道である。城郭から250mほど歩くと分かれ道だが、左のNソウルタワー方向に行く。再び150mほど行くとある分かれ道からは右のNソウルタワー方向に行く。



蚕頭峰フォトアイランドから階段を降りると分かれ道が見えてくると、右に行く。南山噴水台を過ぎると、先にソウル市教育研究情報院の建物が見える。建物の横の階段を降りて左に行くと三叉路が見えるが、道路を渡って小波路に沿って進むと道洞三叉路である。左側に子供広場と、復元された城郭が見える。この城郭の復元工事が終われば、中央広場からすぐに白凡広場を通過して子供広場に行くことができる。



光熙門

ソウル漢陽都城の南東側に位置する四小門の一つで、朝鮮太祖5年の1396年、他の門とともに建てられた。光熙門の別の名前は水口門ともいわれたが、これは近くに水が抜け出る水口があったからという説がある。朝鮮時代に都から遺体を運ぶには光熙門や昭義門を通らなければならなかったが、西は昭義門に、東は光熙門を通過して出て行った。光熙門は、東大門と南大門の間にある南小門ともいえるが、実際の南小門は別の位置にあった。国立劇場前の交差点から漢南洞への奨忠壇路の峠が南小門があった場所である。ここに南小門を建てた理由は、都城から漢江船着場へ簡単にアクセスできるようにするためだったが、実際にはさほど使用せず、完成から12年後に閉鎖した。



城壁の毀損

日帝強制占領期間にひどく毀損されたソウル漢陽都城は、ソウルの急激な膨張によって再び損傷した。ここ光熙門-奨忠体育館区間は、崇礼門-敦義門址区間とともに、城郭の毀損が最も激しい所である。どちらも平地であるため、人口の増加と都心の拡張によって城郭が消えることになったのである。写真は個人住宅の塀として使われた城壁の姿である。



暗門

ひそかに兵を移動させたり、軍需物資調達のために作られた小さな門を暗門という。



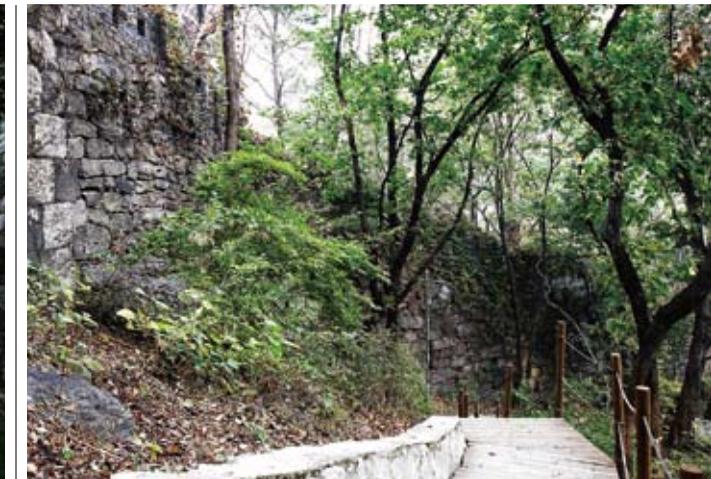
ソウルの中心点

現在、ソウルの地理的中心点は、南山頂上である。ここは、我が国の地理的位置決定のための測量の出発点である最初の経度・緯度の原点があったところである



奨忠洞-新堂洞境界区間の城壁

ソウル漢陽都城の受難の中でも都心平地区間としては奇跡的に生き延びて、私たちに喜びを与えるところである。歳月の跡がそのまま刻まれた城壁と周囲の木々が絵のように調和している。



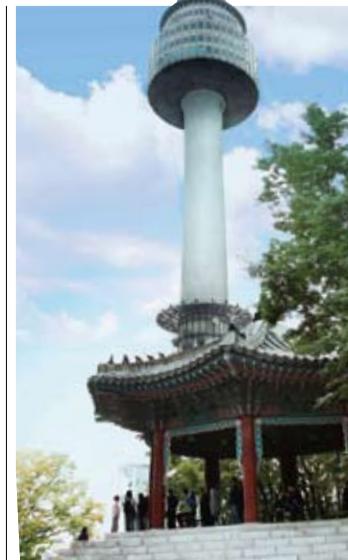
南山区間の城郭

南山循環道路の南側区間の入口から、南山の頂上に登る城壁の様子である。この区間は、太祖時代に最初に築かれた時の姿が比較的に残っている所である。



南山烽燧台と、烽火儀式の再現

南山は全国的に五筋に分かれて伝えてきた烽火を、最終的に受ける所なので、5つの烽燧台があった。普段は烽燧台の煙が一つであり、敵が国境に出現した場合は二つ、敵が国境に接近すると三つ、敵が国境を侵犯すると四つ、そして我が軍と交戦すると五つの煙を上げたという。烽燧台の位置に対する記録がないので、その位置を正確に確認するのが難しい、ただ、そのうち一ヶ所を推定して、今のように復元したのである。



八角亭とNソウルタワー

八角亭は、南山の象徴であり、Nソウルタワーはソウルのランドマークの一つである。八角亭がある所が、朝鮮時代に国の安寧を祈った国師堂があったところである。

区間四 光熙門-崇礼門区間



南山循環道路

南山循環道路は、南山の頂上を基準として、南と北の循環道路に分割されるが、南の道は一部の車が制限的に通行できるが、北側の道は車の通行を全面禁止している。



蚕頭峰フォトアイルランド

南山の中腹にある展望台から突き出た地形がまるで蚕の頭に似ているとって、蚕頭峰という名がつけられた。ここに立つと、仁王山、北岳山(白岳山)、駱山につながるソウル漢陽都城を描いてみるができる。



南山の階段道と城壁

南山烽燧台から崇礼門方向に降りて行くと、階段の横で城壁の痕跡を見つけることができる。城郭に沿って続く南山を下る階段道は、傾斜が緩く幅が広いので楽である。以前は南山の階段道は今よりはるかに狭い一本の細道の階段だった。



オーストラリアの写真家である

ジョージローズ George Rose が撮影した崇礼門

1904年に撮影した崇礼門一帯の風景である。崇礼門の周りの城壁が傷んでおらず完全な形で残っており、都城の内外が明確に区分される。遠く右上に崇礼門の門楼が見え、その後ろに内四山の一つである仁王山が見える。この写真は南山素月路の城郭復元地付近の城郭の上から崇礼門を見下ろして撮影したものと推定される。

出典：1904 George Rose AKF. UCR/CMP

南山公園 子供広場の復元城郭

南山地域の消失した城郭の復元が進められている。第1段階として子供広場区間の城郭が復元された。城郭の復元には3段階に分けて、白凡広場と中央広場の城郭を復元する予定である。



南山素月路区間の復元城郭

子供広場から崇礼門区間に一部残っていた元の城壁を補完して復元した所である。都城の外側の下に行つてよく見てみると、刻字城石も見つけることができる。

ソウル漢陽都城
情報のご案内

ソウル漢陽都城の定期ご案内プログラム

行事日程	：3月～11月、13:30～17:00、毎週日曜日
行事内容	：鍾路区と都城案内が一緒にする、ソウル漢陽都城のご案内
参加人数	：40名、先着順募集
参加方法	：鍾路区観光ホームページでのオンライン受付 http://tour.jongno.go.kr
申し込み方法	：オンライン受付→先着順締め切り→ 受付証プリントアウト→出発
準備物	：楽な服装、靴、カメラ、筆記用具、身分証明書など
主管	：ソウルKYC 02-2273-2276

ソウル漢陽都城スタンプツアー

スタンプツアーのご利用方法	
出発	：4つの地点のうち一ヶ所で、ソウル城郭の観光案内地図を受けてツアーを開始
ツアー	：区間を回ってから、指定された場所でスタンプをもらう
終了	：4つの区間ですべてのスタンプを押してアンケート調査を事後、完走記念バッジを受領
※	崇礼門(警備室)地点は、復元工事の関係で完走記念バッジの提供不可

スタンプツアー運営場所

仁：興仁之門（東大門）	02-731-0808
義：敦義門（西大門）	02-2001-1112
礼：崇礼門（南大門）	02-731-1186
智：肅靖門（北大門）	02-765-0297

茶山(ダサン) コールセンター	120
観光案内電話	1330
救急医療センター	1339
ソウルグローバルセンター	1688-0120
ソウルシティーツアーバス	02-777-6090
ソウル徒歩観光コース	02-6925-0777
鍾路区観光産業課	02-2148-1863
ソウルKYC都城案内	02-2273-2276

ソウル市観光案内所

光化門	：02-735-8688 鍾路区世宗路1街215 (光化門東和免税店前)
興仁之門	：02-2236-9135 中区乙支路6街18-21 (グッドモーニングショッピングモール前広場)
南大門市場	：02-752-1913 中区南倉洞49 (4号線会賢駅5番出口50m前)
グローバルセンター	：02-2075-4119 中区太平路1街25 (プレスセンター3階)
風物市場	：02-3789-7961 東大門区新設洞109-5 (風物市場内1階と2階の間)
明洞	：02-3798-7961 中区明洞2街31-1Mプラザビル5階

彰義門-マルバウイ区間の開放時間

夏期(4月～10月)：午前9時～午後3時まで入場可
冬期(11月～3月)：午前10時～午後3時まで入場可
休館日：毎週月曜日(月曜日が祝日の場合、火曜日休館)
持参品：身分証明書

ソウル漢陽都城インフォメーションセンター

マルバウイ案内所	02-765-0297～8
肅靖門案内	02-747-2152～3
彰義門案内所	02-730-9924～5

ソウルの
漢陽都城
歩き

発行日	2012年2月
発行先	文化体育観光部、(社)韓国の道と文化
制作	アングラフィクス

グリーン観光のホームページ(www.gtour.or.kr)や(社)韓国の道と文化のホームページ(www.tnc.or.kr)で韓国語版・英語版・日本語版のPDFファイルをダウンロードすることができます。

※この本は、著作権法により、無断複製や配布を禁じます。

www.mcst.go.kr, www.tnc.or.kr



区間二の出発点

肅靖門

彰義門

北岳山

区間三の出発点

恵化門

漢城大入口駅

仁王山

昌徳宮

景福宮

昌慶宮

昌信駅

社稷壇

景福宮駅

安国駅

独立門駅

興仁之門

東廟前駅

敦義門址

鐘閣駅

鍾路3街駅

鍾路5街駅

東大門駅

慶熙宮

光化門駅

清溪川

西大門駅

徳寿宮

市庁駅

乙支路3街駅

乙支路4街駅

東大門歴史文化公園駅

光熙門

新堂駅

昭義門址

崇礼門

明洞駅

忠武路駅

東大入口駅

青丘駅

忠正路駅

区間一の出発点

ソウル駅

区間四の出発点

南小門址

萊水駅

ポティゴ駅

ソウル漢陽都城

- 保存・復元区間
- 消失区間
- 歩く道
- - - 工事区間

地下鉄

- 1号線
- 3号線
- 5号線
- 2号線
- 4号線
- 6号線
- 乗換駅

500m



誠信女大入口駅

昌信駅

新堂駅

青丘駅

ポティゴ駅

南山

ソウル駅

会賢駅

東大入口駅

萊水駅

ポティゴ駅

南山

ソウル駅

会賢駅

東大入口駅

萊水駅

ポティゴ駅

南山